

感染症予防に対応した保健室の役割について

研究代表者：和歌山大学教育学部 本山 貢

共同研究者：和歌山大学教育学部附属小学校 上原愛加（養護教諭）

附属中学校 淵川由紀（養護教諭）

附属特別支援学校 境原加奈恵（養護教諭）、鶴岡尚子（養護教諭）

和歌山市立雑賀崎小学校 森本孝子（養護教諭）

1. はじめに

学校教育の現場では、昨年度末から流行した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、令和2年度も児童生徒の感染症予防を目的とした教育環境の整備や保健指導など徹底した取り組みが行われ、教職員が総じて対応にあたることになった。附属小学校、中学校、特別支援学校、さらには公立学校に勤務する養護教諭は、学校現場での感染症予防対策の専門家として実践的な力量を発揮することが求められ、その対応に徹することとなった。今回は、感染症予防に対応した保健室が担う役割について、それぞれの校種で検討を行ったので報告する。

2. 附属小学校の取り組み

右に示したものが、附属小学校で実施している主な感染予防対策である。「広い更衣室の整備」について、今までは体操服への更衣の際、更衣室を使用していたが、狭いため密集環境となっていた。対策として、広い教室を更衣室とし、1mの間を開けてマスキングテープを机に貼り、他児童との間隔を意識して更衣するようにした。また健康診断においても、前述のマスキングテープの目印を利用して間隔をあけて順番を待つようにした。児童保健委員会の取組の1つとして、休憩時間の終わりに「手洗いの歌」の放送を行い、全校児童にむけて手洗いを促した。最近では、本校教員が制作したオリジナルの手洗い歌を2年生の児童が歌ったものを放送している。

（写真右：水洗レバーを肘で開閉、写真左：マスキングテープによる間隔を開ける対策）

- ◇教員によるトイレの清掃、手すり等の共有物の消毒
- ◇専科教室の物品を学級ごとに消毒
- ◇毎日の検温チェック（分散登校中は玄関で確認・押印）
- ◇広い更衣室の整備 ◇健康診断での工夫
- ◇オンラインでの集会 ◇保健委員による手洗い歌の放送
- ◇全教室に換気扇の設置、稼働
- ◇水栓レバーを長い物に交換、肘での開閉の指導
- ◇給食指導時の工夫
 - ⇒配膳を最少人数で、同方向を向き、話さず食べる
- ◇新型コロナウイルス感染症についての指導
 - ⇒各学年の発達段階に応じて など



○取り組みの結果

感染症対策を講じた結果、児童職員ともに感染予防への意識が高まったように感じた。また、例年に

比べて体調不良を理由とする欠席児童や保健室来室児童がかなり少なくなっており、新型コロナウイルス感染症に限らず感染症対策としては大きな成果が出ていると考える。マスクの着用を初め、児童のほとんどが感染症対策をしっかり守って生活ができている。職員も、授業での感染予防のための留意点を考えてくれたり、消毒等に取り組んでくれたりと意識して対策をとっている。手洗いの歌の放送により、児童が口ずさみながら手を洗う様子も見られ、手洗いの回数だけでなく手洗いの質にも効果があった。2年生が歌った音を流すようになってからは、より親しみやすく、手洗いの促進につながっていると感じている。

○今後に向けて

未曾有の事態に学校全体で対策をしていかなければならない一方で、日々の業務に加えての掃除・消毒作業や授業内での工夫等で、職員への負担はかなり大きく、少しずつ対策への緩みがでてきている。再度、対策を確認・共有し、できる限り負担を軽減できるよう考えながら、確実に実施していく必要がある。手洗いの歌に関して、オンライン集会や保健室でのクラスごとの指導等の機会に伝えているが、低学年と高学年では温度差があり、手洗い実施率にも差があるのも課題の1つである。2年生の手洗いの歌の放送で、少しでも意識を高められるようにしたい。また、特別活動等を利用した保健指導の時間に、手洗いの重要性等を指導する機会をもっていきたい。1月の身体測定の際に、各学級に感染症対策について「何のために手洗いをするのか」「マスクをつける効果は何か」「歯をみがくときの飛沫に気を付ける」の3つを話し、意識をさせた。今後は、多くの我慢を強いられている子どものストレスや不安にもアプローチした対策もしていかなければならないと考えている。

3. 附属中学校の感染症予防（コロナ関係）について

附属中学校では、保健室の感染予防として、「検温」と「消毒」に取り組んだ。どちらの取り組みも初期の緊張感から現在のマンネリ化、油断といった状態に変化してきている。

・「検温」について

休校後の再開前に、検温の重要性を確認しプランを立て、初期の登校時は、ほぼ完全にチェックできていた。生徒たちも意識があり、安全面でも役割を果たせた。当時の課題は、生徒玄関先での健康チェックをするために、人手と時間が必要だったことだが、半数ずつの分散登校だったためできた。しかし、分散登校が終了し、玄関先から教室内でオンライン入力をしていない生徒のチェックと検温になり、入室の検温が出来ていない者もでてきた。徐々に未検温者が増加し、生徒から「まだ、やってるの？」の声を聞き、家庭や生徒の意識にマンネリ化や油断が見られるように感じた。対策として、保健だよりや保健委員からの呼びかけ、個々のメールに通知、担任からの指導等を行った。



・「消毒」について

初期に、文部科学省からの通知と本校の様子をみて、考えた場所を職員で放課後に消毒を行った。消毒用エタノールが手に入りにくく、次亜塩素酸ナトリウムでの消毒は、薄めて作ったり扱いに注意が必要で、対応している充実感があったが、どこまで、いつまで続くのかという不安と時間に手間がかかった。

分散登校後、生徒による清掃も始まり、ウイルス耐性 48 時間ということを受け、放課後の消毒の回数を減らした。消毒用エタノールが入手出来たため、手間も省けた。

文部科学省の（手洗い優先）報告を受け、生徒による清掃、特別な共有物のみの消毒となったが、手洗いせずにアルコール消毒のみに頼ったり、マスクを忘れたりとマンネリ化と油断が見られた。

検温や消毒を例にしたように、他のすべての対応についても初期は、情報の少なさや感染の恐れにより、個人の危機意識も大きかったため、保健室からの提案に対し、教職員も生徒も協力的で、取り組みは進めやすかったが、消毒等に対する文部科学省の条件緩和が出るとともに、マンネリ化や油断と思われる事例が少数ながら見えてきた。現在も増加しているように感じる。また、そうした動向とは別に、発熱者の別室隔離や、30 分おきの教室換気など、現実運用することが難しい、もしくは緊張感を持続していけるかに不安感がある取り組みも多い。校内にウイルスを入れないために、感染予防をしながら「ウィズコロナ」の学校生活をどのようにしていくのか、話し合う事はまだまだある。また、制限が多い生活の中でストレスを抱える生徒が増えてきているように感じる。職員同士、情報を共有し、生徒を見守り続けたいと思う。

4. 附属特別支援学校での感染症対策の取り組みについて

【日常の感染症対策】

- ・登校前に家庭での検温及び健康観察の実施（検温表の配付・確認）
- ・登校時のサーモグラフィによる検温の実施
- ・こまめ、丁寧な手洗いの指導
- ・常時換気、またはこまめな換気
- ・給食時ランチルームの混雑をさけるための人数制限、一方方向を向いた静かな食事
- ・給食時の机の消毒
- ・放課後の校舎内消毒
- ・来校者入口を限定し、サーモグラフィによる検温と手指消毒用アルコールの設置

（＊写真右上：玄関の様子、写真右下：ランチルームでの給食）



【その他の場面】

- ・発熱者対応の危機管理対応マニュアルの作成と適宜改正
- ・健康診断実施時の感染症対策・対応
- ・運動会、保護者会等の各学校行事における感染症対策の検討・対応

【休校中】

- ・メルポコによる、毎日の検温と健康状態の把握
- ・オンライン朝の会での、手洗い指導（中学部）の実施
- ・学校再開に向けた保護者説明会での、感染症対策のお知らせとお願いを行った。

【考察】

手洗いをする場面が多くなったため、児童生徒の手洗いへの意識が高くなり丁寧に手を洗うことができるようになった。集団活動の多い学校生活の中で、感染症対策を徹底することは非常に困難であったが、手洗いうがいや換気等の基本的な感染症対策を例年以上に行っていたためか風邪やインフルエンザで体調を崩す児童生徒は例年に比べ非常に少なくなった。このことから、基本的なことを大切に指導を行っていくことの重要性を再確認することができた。

【課題】

- ・発熱者発生時の待機部屋、人員の確保が困難であること。保健室は、怪我や感染症以外の体調不良の児童生徒の対応等もあるため、新型コロナウイルス感染症の疑いを否定できない発熱者と同じ部屋で対応し、様子を見ることは困難であると感じた。また、早退をさせる場合、保護者の迎えを待つ間付き添う教員を確保するのも難しいと感じた。
- ・家庭での健康観察は極めて重要であるが、各家庭に協力をお願いしているものなので、徹底できない。
- ・サーモグラフィは外気温の影響を受けやすいため、真夏や冬の寒い日には児童生徒の体温を感知しなかった。
- ・感染症から身を守る方法（手洗い、咳エチケット、健康観察など）についての指導を各学部と連携し定期的に指導し確認していくことで、今後の感染症対策につなげていきたい。
- ・保健主事を中心とした職員の保健部が構成されていないので、組織的な感染症対策を行うことが難しいと感じた。（今回は各学部主事が中心となった）

5. 和歌山市立雑賀崎小学校における感染症予防に対応した保健室の役割について

今年度は新型コロナウイルス感染症予防のために、臨時休校から始まり、学校が再開されたのは6月であった。学校再開に向けて、また、再開後も各校の実情に応じて新型コロナウイルス感染症予防対策を講じながらの取り組みが必要となった。

本校では、感染症予防対策を念頭に置きつつ、小規模校の利点を生かした教育活動を模索してきた。その中で学校保健を進めていくうえで、養護教諭として留意し取り組んだ一部を紹介する。



（1）取り組み

① 新型コロナウイルス感染症予防対策のスローガンを設定

スローガン：「みんなで命を守ろう ～そのために今自分ができることを考えて行動しよう～」

子供も教職員もこの目標が達成できたその先の自分の未来を想定することで、一人一人が行動すべきことを意思決定し、実践へとつなげることができると考えた。

② 本校独自のマニュアル「新型コロナウイルス感染症予防対策 一日の流れ」を作成提示

教職員の組織活動を円滑に進めるために、新型コロナウイルス感染症予防対策に関する情報収集と情報提供に努めた。文科省発出の衛生管理マニュアルを基に、環境整備や消毒方法、学校再開時の一日の流れと、全教職員の役割分担を確認した。その後も必要に応じて更新しながら進めている。

③ 保健室と待機室のゾーニング

保健室の機能として、体調不良児童発生時は新型コロナウイルス感染症を想定した対応が必要となる。一方で、従来の救急処置やメンタル面の対応も変わりなく必要である。そこで、発熱や頭痛等の体調不良児童の来室時に備えて、他の来室児童との接触を避けるために、保健室の対応ゾーンを分離した。3か所ある出入口の内1か所を専用出入口とし、そこからのスペースの一部を天井からビニールシートで仕切って確保した。また、感染疑いのある症状で早退する場合の待機場所を保健室以外に設置した。こうして体調不良以外での保健室利用に際しての安心安全な空間を保障しつつ、感染拡大予防に努めた。

④ 生活リズムの定着化と新しい生活様式の習慣化を図る

3月からの臨時休校が延長されることになり、その間の児童の体調管理と生活リズムの調整を両輪で取り組むことが必須となった。そこで、新型コロナウイルス感染症に対する免疫力・抵抗力をつけるために必要な食事・睡眠・適度な運動と、こまめな手洗いを新しい生活様式の中で習慣化することを健康教育の柱として、取り組みを始めた。その一つが、臨時休校中から学校再開後の6月中にかけて、1週間単位の生活点検の実施であった。その際、マナーリ化を防ぎ実践への意欲の向上につなげるために、毎回感染症予防や生活リズムのワンポイントアドバイスを掲載し啓発に努めた。加えて、学校再開時に全校児童を対象に、新しい生活様式での学校生活と感染症予防についてパワーポイントでの保健指導を行った。その後も長期休業前後や集会等で呼びかけている。手洗いに関する指導は、2年生でブラックライトの手洗いキットを使用して洗い残し部分を確認した。1日の中で必要に応じて手洗いの歌を放送し、手洗いが生活の一部となるように全校で取り組んでいる。

⑤ 小規模だからこそできる行事計画への参画

行事の立案実施に留意したことは、感染症予防対策を講じながら、本校の規模や伝統である異学年による縦割り活動の利点を生かしたものとなるように工夫したことである。これにより、急激な環境変化による児童の身体的・心理的ストレスを最小限に抑えることができ、健康状態の向上につながると考えた。新しい生活様式を踏襲し、3密を避けてソーシャルディスタンスや消毒、検温など感染予防対策を計画案に盛り込み、保護者・地域・隣接幼稚園・学校医との連携に努め実施した。

(2) 取り組みの結果及び考察

新型コロナウイルス感染症予防対策のスローガンを設定し、それを健康教育の様々な取り組みの根底に据えて、保健室から発信してきた。全校で目標を共有することで、教職員・児童ともに、個と集団の健

健康管理を意識した行動選択ができていると考えられる。学校再開時の子供たちの健康状態は良好であり、家庭中心の生活から学校生活へとスムーズに移行できていた。生活点検の実施により、親子で1週間単位の生活を振り返りながら、個に応じた新しい小さな目標の積み重ねができていた。その結果、規則正しい生活と健康管理のモチベーションを維持することにつながり、成果があったと推察される。本校は小規模校の利点を生かし、全校児童が集合しての活動や異年齢の縦割り活動が可能である。その中で6年生はリーダーとしての意識が高く、自主的かつ積極的に活動している。子供たちは感染症予防対策を講じた活動計画を工夫し、実際の活動場面では、ソーシャルディスタンスの見本を示し、呼びかけながら、下級生たちの良いモデリングができている。これにより、全校児童が集団の中で、自己と周囲の健康管理を意識した行動がとれるようになっている。こうして、新しい生活様式を取り入れた縦割り活動を本校の伝統として、次世代に引き継いでいく基礎を構築できたと思われる。コロナ禍において、子供たちの健康管理や健康診断をはじめ、保健室の役割を再考せざるを得ない状況である。チーム学校として保健室が重要な位置に置かれていることや、重責を担っていることを実感した一年であった。

今後も子供たちが笑顔で元気に本来の力を発揮できるように、その根底には、常に『みんなの命を守るために、今自分ができることは何か』を考えて行動する子供たちの育成をめざして、保護者・地域・隣接幼稚園・学校の連携を深めながら、時代に即した学校保健活動を模索し、保健室を機能させていきたい。

(写真：ソーシャルディスタンスを可視化し玄関に掲示)



6. まとめ

令和2年度は、「感染症予防に対応した保健室の役割について」をテーマにして大学、附属3校、公立学校の3者間で共同研究を実施した。今年度は、新型コロナウイルス感染症の対応に追われ、本来実施しなければならないルーチン業務に上乘せして非常的な対応が求められた1年であった。こうしたなか、それぞれの校種で適切な感染症予防の対応ができたことでいずれの学校でも感染者を未然に防ぐことができた。文科省が示す「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心に～令和29年3月」報告書において養護教諭の役割は、「児童生徒の健康課題を的確に早期発見し、課題に応じた支援を行うことのみならず、全ての児童生徒が生涯にわたって健康な生活を送るために必要な力を育成するための取組を、他の教職員と連携しつつ日常的に行うことが重要である。また家庭・地域と連携しつつ、日常的に、「心身の健康に関する知識・技能」、「自己有用感・自己肯定感（自尊感情）」、「自ら意思決定・行動選択する力」、「他者と関わる力」を育成する取組を実施しなければならない。」としている。今回の感染症予防に対応した保健室の取り組みは、「養護教諭」としての力量を発揮し、「チームとしての学校」に繋がったと考える。今後、さらに感染症予防対策の具体的で効果的な方法を情報共有し連携していきたい。また学校保健に関する様々な課題解決に向けて、大学と附属学校養護教諭、公立学校との連携をこれまで以上に強化していきたい。